

「ホメーロス輪読会」の感想

生田康夫

次頁の記事「受け継ぐ西協の学統」が掲載されたのが一九八三年、そこで誕生を紹介されていた「ホメーロス輪読会」はそれから二十六年間、週一回ペースで開催されてきた。

『イーリアス』の舞台は包囲十年目を迎えたトロイアの戦場だった。それまでに閲した戦いの期間を詩篇は「大いなるゼウスの統べる実に九年という歳月が過ぎ去り、船木は朽ち果て結網もすっかり緩んだ」(第二歌一三四―一三五行)と歌う。『オデュッセイア』の主人公の故郷帰還は二十年目であり、遠征出發時幼かった息子テレマコスは成人している。二十六年はそれ以上だ。当然輪読会参加メンバーは大分入れ替わっているが松明は受け継がれ、先日第七百回目を迎えた。これは驚くべきことではないだろうか。

輪読会七百回の歩みについては、筆者は会に近年加わった者

であり、より語り手としてふさわしい方が他におられると思うので、ここでは輪読会について一参加者としての感想を記してみたい。

「ホメーロス輪読会」は『イーリアス』を終え、現在『オデュッセイア』の二十二歌が進行中だ。本誌表紙の背景にあるピエロンの注釈書をテキストに週一回、四十行ほど進む。輪読会のよいところとして、疑問点を質しあえること、感想を交換できることがあるのはもちろんだが、ホメーロスの場合一番の醍醐味は朗読にあるのではないかと思う。

ブルーストは『読書について』において、『ルカ福音書』中の文章を中断するコロンに出会うたびに次に続く唱句を歌い出すために朗読を止めた信者の沈黙が聞こえてきたとして、その沈黙についてこういつている。「その沈黙は一度ならず読んでいる私に薔薇の香りを運んでくれた、その薔薇の香りは(福音書を読む)会合のもたれている天井の高い部屋に開いた窓から微風が広げていたもので、千七百年も前から消え失せることがなかったのだ」(『胡麻と百合』メルキユールドフランス版五十六―五十七頁)

輪読会でも時として同じようなことがある。波のような歩みのような、呼吸のような脈拍のような叙事詩の六脚律のリズムを耳にし口にしてしまうと、二千数百年の時を超えてホメーロスその人の朗誦の場に居合わせているような錯覚に陥ることがあるのだ。そんな時、敏感な人であれば白金の言語学研究所の一

室に「葡萄酒色の海」の風のそよぎを感じとるのかもしれない。あたかもブルーストの小説で一片のマドレーヌ菓子の風味が幼年時代の記憶を甦らせるように、句読点やリズムが人類史の記憶をよみがえらせる、これも驚くべきことだ。

ところで、この「驚く」にあたるギリシア語 *deumaiōs* (タウマゾー) についてひよっとして西脇順三郎が漢語との対比で

文化往来

明治学院大学言語文化研究所が、このほど年刊の雑誌「言語文化」を創刊した。一年前に亡くなった英文学者であり詩人であった西脇順三郎の追悼号でもある。慶応義塾を退き明治学院に移った西脇は、この言語文化研究所で国際的にも珍しいギリシア語と漢語の比較研究を膨大な一巻本にまとめあげた。この学統が今回の創刊号に新しい装いでよみがえっている。

今から二十年前、西脇はこの研究所で古代漢語の音体系に疑問を投げかけ「詩経」の購義を始めた。既存の注釈に見られる「無意味な助字」を排し、インド・ヨーロッパ

語系との比較をしながら、漢字の音と義を解明したのだ。語系の異なるとギリシア語と漢語を連結させ、内的相関を試みした大胆な講義だった。「言語文化」には、この講義に参加した学者たちの回想記やエッセーが収録されており、西脇の発想の原点が語

受け継ぐ西脇の学統

られているので、難解な大著「ギリシア語と漢語の比較研究ノート」を解説するヒントが見いだされる。

詩人西脇順三郎の研究は没後一年間の歳月に文芸雑誌や詩誌に出尽くした感があるが、「言語文化」には西脇の同僚や弟子たちが日記や書簡を利用して、詩人の素顔を

描いている。西脇の詩を多彩なものにしていく「ポボーイ」「パバーイ」などが、ギリシア語の感嘆詞から取られた裏話などもある。また西脇は画家としても一家を成していたが、詩と絵画との関連を具体的に書いた話もあり、難解といわれた西脇作品解説の補助線も引かれている。

さらに六世紀ごろから十世紀にかけてのルーン文字の影り込まれた石、木刀、くし入れなどの写真や解説もあり、コンピュータを導入してのギリシア語文献研究のレポートもある。西脇の学統を受け継ぎ、古代ギリシア語でホメーロスを読む会も発足したようだ。一人の学者の成果が新しい形で受容されるところに文化の伝承が根付くのであり、その好例といえよう。

何か触れていないかと調べてみると、果たして『ギリシア語・漢語比較研究——材料集1』(明治学院大学言語文化研究所編、三一〇頁)にあった。「讃サン *tan deumaiōs*」としていて、漢語「讃」との間に相関を見出していたようだ。なるほど *deumaiōs* は驚きのなかでも讃嘆を込めた驚きだ。『イーリアス』の最終歌で、ヘクトールの遺体を乞い受けに来たプリアモスとそれを受け入れたアキレウスの間のこんな場面がある。「ダルダノスの裔プリアモスはアキレウスを *deumaiōs* した、体つき

といい様子といい神に見まがうほどであるのを。一方タルダノスの裔プリアモスをアキレウスは *deumaiōs* した、気高い姿を見、言葉聴くにつけ」(第二十四歌六二九～六三二行)

息子を殺されその下手人の下に遺体を乞い受けに来た老王、腹心を失くし老父を故郷に残したまま自らは異国で戦死する運命を知る戦士、その本来仇敵同士の両者が *deumaiōs* し合う。『イーリアス』はまさに驚嘆 (*deumaiōs*) すべき詩篇だ。

『日本経済新聞』1983年4月27日